

第7回 中野市立小学校及び中学校適正規模等審議会会議録

○ 日 時

平成25年7月18日(木) 午後3時～午後5時

○ 場 所

中野市豊田支所大会議室

○ 出席者

【審議会委員】

小島哲也会長、清水正副会長、上原一雄委員、下川昌平委員、永池隆委員、山岸洋子委員、市川和仁委員、市川大輔委員、小林健一委員、小島佐和子委員、伊藤勇委員、酒井美智子委員、湯本美奈子委員、浅野光政委員、中島武久委員、北原新一委員、柴垣顕郎委員、関うた子委員、古川今朝治委員、湯本一委員

【市】

小嶋教育長(辞令交付のみ)、小林教育次長、杉本学校教育課長補佐、富田主査、渡辺主事補

○ 会議内容

●開会に先立ち、新委員の紹介及び辞令交付

事務局；みなさんこんにちは、お忙しいなかお集りいただきましてありがとうございます。

審議会の開会に先立ちまして、委員の異動がございましたので、ご紹介をさせていただきます。青木幸子委員の辞職により審議会委員1名が欠員となっておりますが、再度行いました追加の一般公募により、関うた子委員が決定をされました、ここで、関うた子委員へ小嶋教育長から委嘱状を交付させていただきます。恐れ入りますが関委員さんはその場でお立ちを願いたいと思います。

【小嶋教育長から委嘱状を関うた子委員に手渡した】

事務局；ありがとうございました。これで委嘱状の交付を終わらせていただきます。なお、教育長はここで退席をさせていただきます。

●開 会 (15:03)

副会長；どうもみなさんこんにちは。毎日、大変な暑い日が続いています。元気でお過ごしのことと思います。少し期間が前回から空きまして、ちょうど今、振り返ってみますと、私ども昨年の9月に辞令をいただいて、今日までに審議会が第7回目を迎えるわけでございます。それだけの回数をやってまいりました。その間に人間の入れ替え等もありまして、本日は、ただいま、関さんにお入りいただいて、25名揃ったというわけでございます。

本日の出席状況ですが25名中、今、19名の委員さんに出席いただいております。

そして、また追ってとりつけてくださる委員さんも数名おるかなと思っております。

規程の第6条第2項に過半数が出席しなければならないと、このところにかかっては、出席数を満たしておりますので会議を開くことができます。これから開催したいと思いますですがよろしく願いいたします。

なお、本日は、お手元の次第の会議事項に近隣の学校の現状についてということで、講師に木島平小学校の関先生にお越しいただいて、これから小島会長から開催のごあいさつを申しあげ、そしてその中で講師の紹介をしていただいたり、本日の内容の進め方等について会長の方から話がございます。その後、進行を会長が議長となるとなっておりますので、この後続けてよろしく願いいたします。

小島会長；会長の小島です。今日初めてお見えになった委員の方もいらっしゃいますけど、よろしく願いいたします。今日は、前々から内容を検討したうえで木島平小の関校長先生に来ていただいて木島平村の取り組み、木島平小学校の現状を、ぜひ我々の審議会の審議の内容にマッチするお話を是非いただきたいということで、昨年度からご依頼申し上げて快く引き受けていただきました。貴重なお時間をいただいておりますのでお話しただけということで楽しみにしていました。私も前もって学校の方へお邪魔して雰囲気だけはちゃんと掴んでおかないと、お願いするのに失礼だと、木島平村へ初めて学校の方へお邪魔しました。その時にお聞きしたものと、改めてここでスライドを今日はたくさん持って来ていただいておりますのでお話しただけのことと思います。

今日の進行です。この後、関先生のほうには内容としては大きく2つのパートに分かれるということですので、だいたい20分・20分位、前半後半に分けて話をさせていただきます。そしてその間、5分から10分位、委員の方達からの質疑応答をしていただきます。そして全体が終わったあと、改めて時間を取って質疑応答の時間を取りますが、間にちょっと一息を挟めばちょうど1時間15分位になるかなというところですよ。という訳で今日は十分時間を取っておりますので是非、良い情報交換、意見交換ができればと思っております。

関先生、よろしく願いいたします。

●講演 (15:08)

関校長；紹介していただきました木島平小学校長の関です、よろしく願いいたします。

今、お話があったように前半の方は小学校の合併に至る経過を資料を使ってご説明したいと思います。これも私、元教育長さんにお聞きした話ですので、それを私なりにまとめましたので、伝えるという立場で、私の個人的意見は入っておりませんので。

その後、後半の方は学校の様子をご紹介したいと思います。

【関校長先生 資料、スライドを使って説明（前半）】

私は22年の2月に木島平小学校に赴任いたしました。ですので、もう行った時には既に統合がなされておりました。前の校長さん達がやってくれた後を引き継いだ形です。ただ、元の教育長さんにお話を聞くとその発端は平成の大合併だよというお話でした。1市2村、飯山市と木島平村と野沢温泉村でつくる新市未来構想検討委員会があったようです。そこで最終答申の中に木島平村はスキー場を含む第三セクターを手放して統合しましょうという、そういう答申があったようです。それでは木島平村は合併できませんということで自立の道を探りようになった訳ですが、その時に自立プラン検討委員会を立ち上げたそうです。それは各団体から委員を募って五十数名、主に1年半かけて、どういう村づくりを目指していくのかを検討されたようです。そして自立プラン検討委員会の答申はたくさんあった訳ですが、学校教育関係でこの2つ、木島平村はみなさんご存じのように往郷村と上木島村、穂高村の3つであっています、それぞれ保育園と小学校を抱えています。中学校は1校です。ですので3保育園を1園とすることが望ましい、それと3小学校を2校ないし1校にすることが望ましい、こういう答申を自立プラン検討委員会、学校教育関係で出されたということです。それでその答申を受けて教育委員会は学校統合問題検討委員会を設置いたしました。それは答申内容の「3校を2校ないし1校にすることが望ましい」について、これも1年間各団体より53名のメンバーを募って検討しました。これと同時に村長と教育長が全地域を回り、このプラン検討委員会を出ている答申のこれを村民に説明してもらったようです。全地区を対象とする行政懇談会を開いて村長と教育長が2人でそれぞれの地区を回ったということです。

学校統合問題検討委員会で議論され、たくさんいろんな意見が出されたようです。代表的なものを載せてあります。

少人数でも行き届いた教育が可能ではないかという意見、これはここにあるように全員共通した内容です、少人数でも行き届いた教育が可能であるのだが、少人数の指導を究極に着き詰めていけば、1対1ですと、それは塾ですと、学校はそうではありません、学校教育では子供達の多様性とバリエーションの中で豊かに絡み合っって人間形成がされてゆくまで未来を担う子どもたちを育てていく、それは教育行政として責任があるんですよというこういう立場で話し合われたのです。

2番目に統合してどういう、どのような学校・教育を目指していくのか。既にここでは木島平村では小中一貫教育を目指しますよという前提で説明がされておりました。例えば、英語教育、音楽教育を小中合同でやりましょうと、26年度から小中一貫になるわけですが、もうすでにこの頃からこういう話は始まっていると。

3番目、この検討委員会で検討していても埒が明かない、住民にアンケートを取る必要があるのではないかという声も多々あったようです。これについては検討委員会で選ばれた方が議論する中で方向が定まらないことを今更どうするかということ住民に、一般の人にアンケートを取ることは好ましくないという、責任をもって大人が結論を出しましょうというふうにしたそうです。アンケートを取ってしまうと、数字が独り歩きをしてしまう、少子高齢化に歯止めがかかっていない、当時6千人いた人口も今は5千を割っています、そういう中で十年後の教育行政に責任をもてないでしょという話、この他にも2校ないし1校にするということなので、1校にしたらいいか2校にしたらいいかという議論もあったようです。

ただ、2校にすると1校を分けなくてはいけない、通学路を分ける、それはできないという、最終的には1校というふうに決まったようです。

教育長と村長が全地区を対象とした行政懇談会では統合の反対の意見は皆無だったそうです。ただ、今話したように検討委員会では様々な意見が出されました。しかし、わが校がなくなってしまうのは寂しいとか、母校がなくなってしまうのは切ないとかそういうノスタルジ的な意見は誰もが持つところなんだけども、ここは教育論として検討していく、そういう共通の意識で検討を1年間やったそうです。

2つ目です、学校統合問題に教職員は参加していない。この委員会では学校職員は参加していなかったそうです。学校の職員と統合問題を切り離して考えていったそうです。ですので学校はどのような子どもを育てるか、そういう視点で学校づくりを検討するというふうにしたそうです。ここのところは元教育長さんが言われてました。校長先生たちを招集し先生方が統合問題をするのではないよというお話をされたそうです。というのはさっきも言いましたが、誰もが学校は消えてほしくないというノスタルジ的な意見をもっています。先生方と保護者がこの未来を担う子どもたちについて統合問題を話している中で、なくなっては困るという意見で終始したら、もう収集がつかないと、ですのでこの検討委員会には学校の先生方は参加していないというふうに話されました。

木島平教育の推進ということで、どういう子どもを育てるかということが話題になります。その時に21世紀を担う子どもを育てるということに終始したそうです。それはひとりひとりケアする力、聴く力、感じる力、コミュニケーションの力、問題解決をする力、この5つを子どもたちに付けさせて21世紀を担う子どもたちを育てるというふうに進んだようです。このことは学校の現場のほうに活かせる、活かしている状況です。

統合問題と同時に、先ほども言いましたが、1村・1園・1小学校・1中学校が実現すると、そうすると保・小・中の一環教育を進めるというふうなことになります。保育園と小学校の連携、今やっていることです。小学校と中学校の一環教育を実施、26年度にもう実施されます。準備委員会を立ち上げてやっています。

地域とともにある学校をつくるために、コミュニティ・スクールの申請をして、学校運営協議会の設置を26年度に行います。ですので24、25年度の2年間は文科省から委託事業として助成をしていただいています。

文部科学省は学校・家庭・地域連携協力推進事業としています。これを受けて長野県は信州型コミュニティ・スクール推進事業として各地区におおしています。本村の事業内容はコミュニティ・スクール学校運営協議会推進の取り組み、研究内容として小中一貫教育の推進を支援するための木島平教育学校運営協議会の中で検討すると、これは学校を支える地域の仕組みというふうに理解していただければいいと思います。

これが今、検討している組織図です、こういう組織になります。総務部、支援部、地域部このコミュニティ・スクールのお便りが手元に配られていると思いますのでご覧ください。これは木島平教育の特徴です。学び続ける子どもと教師と書いてあります。豊かな自然、農村文明の村づくり、教育村長の気風とあり、子育てに最適な環境の中で世界に通じる21世紀型の教育を取り組んでいきましょう。具体的には教師が一方的に説明するのではなくて、子ども同士が共同的な学び合いをしていくという、学びの共同体づく

りということで日本を代表する先生たちに、7名ですかね、来ていただいています。

学校と園を統合教育にしていく、新しい学校づくりに着手しております。

特徴②です、先ほど説明しましたが、保小連携教育の推進、小中一貫教育の推進、具体的には保小合同の活動、共同研究、小中が6・3制から4・3・2制、4年生まで、5年生・6年生・中1の3年間、中2・中3の後期、前期・中期・後期というふうに試んでいる関係です、ですので24年度の小学6年生はクラス替えをしないでそのまま中学校へ上がっていきました。

特徴③、先ほども言いましたが、学校を支える仕組み作りです。コミュニティ・スクールです、この辺に略図が書いてありますが。

この特徴を3つ持ってやっているのが今、木島平で取り組んでいることです。これは統合する時に既にいろんな方の意見の中で、検討会の中で、総合的にこう取り組んでいく方向が打ち出されていますので、統合したことを契機に一石二鳥・三鳥というふうに総合的に村づくりを進めていく、ここが私の考えです、思ったことです、こういう教育行政の取り組み方を学んだこととして、未来を担う子どもたちのための条件整備、それは少子高齢化がどんどんどんどん進んでいく中で、その条件整備をするにはある程度の方向を打ち出さなければいけない、子育てビジョンを明確化しなくちゃいけない、それで新たなプランとしての小中、保小中一貫教育への着手、このことは、やはり責任ある教育行政のあり方かなというふうに思いました。

統合する前は、南部小学校が78名、中部小学校が100名弱、北部小学校も80名位、1校が100名に至っていません。そうすると1年生から6年生まで20人を割っている状況なんですね。それが統合をして269名というふうになりました、複数学級が誕生しました。

2つ目、地域とともにある学校づくりを推進していく、これはコミュニティ・スクールのことをいっています。田舎ですので先生方が手をあげれば、みんな協力してくれます。ただ、そういうコミュニティがあるんですが、だんだんだんだん高齢化が進んでいく中で決まりきった人が学校に関わるような状況が生まれています。そうではなくて仕組みとして地域が学校を支える学校運営協議会を導入することは先進的で新しいなというふうに思います。ですので地域で学ぶ体験型学習が推進しやすいです。その中では地域の文化、農作業に携わってきた人々、じいちゃんからばあちゃん、いろんな方が学校に入っています。まさに学校が地域に開くことが実現していく、そういうふうになってきているのではないかなと思います。先程も総合的に複合的に取り組んでいくというのはやはり教育に必要ではないかなというふうに思いました。

統合当時の児童数の推移です。22年に統合しました、3校統合です、269名いたんですね。学級数は14です、このうち2つ特別支援学級が入っていますので、1年生から6年生まで12クラス、すべて2学級です。23年度、2年目は258人、同じです。昨年260人、学級数は同じです。今年265人、ちょっと増えました。現在1年生が47名います。来年です、240名です、1年生が24名になります。27年度、新入生が31人です。どんどん減っていきます。統合したからといって、すべてがうまくいくわけではありません。どんどんどんどん減っていくんですね、そこにまた学校教育の中の課題があるわけですが、一応こういうふうになっています。全て30人規模学級の加配をいただいて、ある学年を2学級としています。統合前は1学級でした、そうすると担任同士が授業交換とか隣のクラスの先生ま

たは学年の上の先生達と連携が組みやすい、しやすい、そういう利点が生まれてきます。何よりも1学級だと担任が学級を私物化してしまいますよね、特に木島平小学校は廊下がオープンになりますので、オープンスクールになっていますので外から見える状況です。私、いいなと思うのは複数の学級があると担任が学級を私物化しないことがひとつ、二つ目はいろんな子どもたちの多様性の中で生活している訳ですから、いろんなトラブルやそういうものが日常的に起こる、それを解決しながら生活していく、そういうことは少人数とはまた違った意味の社会性だと思っています。このような状況です。

ここまでの今までの聞き取り調査をして資料にまとめたところ、今、進んでいる現状をご説明いたしました。

あと、前の教育長さんはこういうふうに言っていました。木曾の大桑村も以前、3校を1校にしたそうです。そのきっかけは1学級10人の学級があったと、男子が2名、女子が8名、1年生が6年間ずうっと男子2名、女子8名で上がっていくと、この男子2名は隣の福島町の方へ転校させるという話が保護者の方から沸き上がったそうです、それについて村は子どもにこんな思いをさせてはいけないということで、大桑村3校が1校に統合したということだそうです。ですので統合には人数もあるんだなあ、男女の比もあるんだよというふうに言われていました。ただ、幸いに本村は3校、100人弱の学校が3つ統合した、ほぼ男女比も等しいくらいです。また、和歌山県の話をして、和歌山県は山村が多い県でなかなか合併がうまくいかない、教育行政は自治体でそれぞれ学校をもっている訳で、そのところがなかなか合併がうまくいかないと、ただ、今やっているのは市町村は違うけれど通学が便利であれば通学してもいいよという、広域行政で学校を考える、そういう仕組みをあの当時は作っていました。当時というのは平成の大合併の時ですね。そういうふうに言われていました。ですので学校が統合するという事は村にとって大きな課題でもありますので、いろいろな視点から可能性を探りながらそれぞれの市町村が合併・統合問題を検討しているんだなということが、私、話を聞いていてわかりました。ここまでの前半でよろしいですか。以上です。

●質疑応答（前半）

小島会長；ありがとうございます。お話の後半はこのあと続き、その資料もお手元にあるかと思いますが、とりあえず、ここまでの内容でいろいろお聞きしてお答えいただければと思います。

古川委員；学校運営協議会、これについてもうちちょっと細かにお願いします。

関校長；学校運営協議会とは、学校には学校評議会というのがございますね。学校の中には小学校も中学校も学校評議員という方が教育委員会から任命されて、5名ほどいらっしゃると思います。それとは違うんですね。そうではなくてこの表を見てもらうと分かるのですが、学校は校長さんの持ち物ではありません、ということです。この学校運営協議会のこの方たちが学校を運営していくのです。ですので、その委員は保護者であったり、地域の皆さんであったり教育委員

会であったり、また校長であったり。この委員会で学校の運営をしていくんです。この委員会は、例えば木島平村でしたら、スキーが盛んです。何とか、スキーにもっと力を入れてほしい。という、この文化スポーツ活動の支援、ここのところで、もっとスキーを手厚く支援しましょうというふうになるかもしれません。英語教育もやって欲しいですね。というような特色ある活動にしたいというふうに、この学校運営協議会のほうで方向が出されれば、じゃあ支援部か地域部で誰かが中学校に行って英語の教育をやってくれませんか、というような、そういうふうになっていきます。ですので、一校長が学校を運営するのではなくて、学校は地域の物ですので、地域の代表と学校の校長が一緒になって学校運営会を作って運営して変えていくということです。具体的にはこういういろいろな部が設置されて地域の方が学校に入り込むという仕組みです。ですので、校長が学校の運営の基本方針とか計画をこの学校運営協議会のほうに提出しなければいけない。提出されたものでこれはおかしいとなると突き返されます。今まではこういうシステムじゃないんですね。教育委員会もこの協議会で検討されたことを受け入れなくてはいけません。また、ここからこっちのほうにアドバイスもいくようなシステムになっています。なので、要は外部の人を取り込んで学校運営協議会という組織をつくって、そこで検討したことを学校運営に生かしていくというそういうシステムです。ですので、ここで話し合ったことが、意見を教育委員会に申す、話し合ったことが、こっちの小学校に言えるという立場だったら、地域の方の意見でも小学校、中学校の運営に反映されやすいというシステムです。

小島会長；先生、こういう連絡協議会を設置しましょう、あるいは設置しなければいけないというようなコミュニティ・スクールの事業の基礎なり取り決めがあるのでしょうか。

関校長；そうですね、文科省の事業なんですね。学校・家庭・地域連携協力推進事業という中に、いろんなタイプがあるんです。本村の場合は小中一貫教育を推進するためのコミュニティ・スクールというふうになっています。隣の飯山市の秋津小学校は小中一貫とはしていません、地域の協力というコミュニティ・スクールになっているはずですが。この研究内容によって変わってきます。ただ、学校を地域が支えるという仕組みは変わりありません。本村の場合は小中一貫という立場でこの研究をしています。長野県でも結構、上田とかあると思います。ちなみに昨年24年度、新潟県上越市の小学校中学校が全部コミュニティ・スクールになりました。教育委員会指導で。でもだからといって上越市の小中学校が全部、小中一貫にはなってはいません。あくまでもこれを使って学校を支える地域、地域応援隊を作ったという感じですが。これには助成があります。Aタイプなので補助金と人材を1人付けていただけるようになっています。

小島会長；よろしいでしょうか。

古川委員；中野の小学校にもそのような組織があるような気がするが、どうですか。
学校支援というか、色々な人が相談に乗ってくれる会があるような気がするけども。

事務局；中野市の場合、それぞれ、先ほど関校長先生から話がありましたように、評議員会制度はあります。ですので各小中学校に5名ずつの評議員がいて評議員会が開かれてその中で学校運営のアドバイスを、そういう形で、支援という形の組織的なものは、制度上は中野市の場合はまだございません。

小島会長；たしか前回、お二人の先生に話題提供していただいた時の資料にも、情報として上がってたんですけど、こういうコミュニティ・スクールを推進する文科省の事業の中でこうした運営協議会を設置して、中身はおそらくテーマによって違うのしょうけれども、ああいう仕組み作りをなさよという、恐らく取り決めがあるのだと思いますし、今の学校支援地域本部事業というものの資料の中にありましたよね。いずれにしろ地域と学校が協力連携して学校作り地域づくりを進める仕組みがいくつか今、存在するということだと思います。

関校長；コミュニティ・スクールというチラシは手元にありますか。今、この部分をどうしようかというので一年目は終わりました。組織がつくられているんですね。こういう組織で、中身は学校職員に入っていたり、それぞれ教育委員会が任命をして集まっていたり入っています。大学の先生、それから文科省のコミュニティ・スクールのマイスターの岸さんにも入っていて、今検討をして2年目です。これはつい最近出た第5号ですが、村民の皆さんにも配っていて、コミュニティ・スクールって何？というところから始まって、だんだんだんだん浸透しているような状況です。だから小中一貫教育をささえますよ。子どもたちの学びの学習を支えますよ。それについて村民の皆さんお手伝いできますよということで、学校評議員会はそういうふうなお手伝いはなかなかできないと思うんですけど、地域にはブドウの達人がいたり、米作りの達人がいたり、りんごを一生懸命作っている方がいたり。そういう方たちがいらっしゃるので、そういう方たちに入っていたりしながら、子どもへの活動支援を踏み込んでいくことができます。今までは、先生たちがやっていたんですね、それを。先生たちが一生懸命地域に出て探して学校の子どものほうに教えてたんですが、今度はそうではなくて、先生たちよりもむしろこういうシステムの中で、例えば、僕は科野小にいましたが、科野はお米、ブドウ、りんご、どうしても体験学習を小学校の時に経験してもらいたい。でも担任が変わった時にやっていない学年があったら困るじゃないですか。4年生ではここ絶対やって欲しいよねとか、卒業するまでにりんごの傘がけくらいは絶対覚えてほしいよねとか、地域産業を小学校の時に経験して欲しいねとか、やっぱりあるんですよ。そういうことを、ある学年がやって、ある学年がやらないのではなくて、システムとして体験して欲しい、そういうのがあれば出来やすいですね。

古川委員；中野の中にも、今、関先生が言ったような事の、素地が十分ある、区長とか、市議会議員とか、皆よって学校の問題をやっているわけだよ。それをコミュニティなんとかという英語にただで、中野にはそういう素地が十分ある。たまげたことではない。

関校長；そうです。だから信州型コミュニティとって、いろいろやっていることを、それは良いと思います。

湯本委員；湯本と申します。今、コミュニティ・スクールについては前回、上原先生からお話が承って、読み返してみても、ああ、こんなシステムがあるのかなということに関心をしておった訳ですが、今、関先生のほうから改めて説明を聞いてなるほどなと思った訳ですが。この力関係、先ほど説明の中でもって、校長から出す、承認する、それから教育委員会の方も出す、承認するという、この力関係が非常に問題になるような気がします、資料を見ると土屋住職が推進委員長ということになっておると書いてありますが、この力関係はどんなふうなことになっていますか。

関校長；ここにもあるんですが、この中には校長も入っています。ですので学校運営の基本方針とかそういうのはまだできてませんが、これからできるんですけど、常に提案したり、バックしたり、今までは校長さんが変わると学校が変わってしまうケースが多いです。僕も昨年15校くらい県外も見ました。2年間ぐらいで結構見ているんですが、どこに行っても学校の長が変わると、学校が変わってしまうんですね。良い方向で動いていて、それでもその先生がやりたい方向へ進んで行っちゃうこともあるんですね。それだと一校長が赴任した2年間3年間で、なくしてしまうものも大きいんじゃないですか。ただ学校は校長の持ち物というよりも地域の持ち物ですよ。だから子どもがいて、学校があつて、村がなかったら教育委員会はありませんが、学校もありません。そうすると校長も組織の一員としてこの運営に参加する姿勢でないとダメだと思って僕はいるんですけど。だから、この関係は今、湯本さんから言われたように、できるだけ力関係にならないようにしなければいけないと思っています。今年2年目ですので、これを組織化して具体的に26年から動き出すのですが、確かに一方通行ではたぶんダメだと思います。お互いこう誘因の関係でないとうまく回ってこういう組織をつくっていく。かといって、やはり運営に関しては多少の緊張感がないといけないのではないかなというふうなことが思っています。決して教育委員会が私たちの意見を全然聞かないというそういう姿勢ではありません。そこはこれから作っていくうえで注意していかなければいけない。

湯本委員；すいません、言いづらいことをはっきり言いますね。私もちょっといろいろなところへ口を挟んできたのですが、中野市には晋平のあれでもって少年少女、各小学校中学校から、一般から、発表会があつたり、発表する会が毎年あるのですが、まあはっきり申し上げてその学校に音楽に秀でた先生がいらっしゃる学校と、そうでない学校では同じ合唱を聞いても全然違うんです

よね。今、関先生がおっしゃることと私は同じような考えでおりますが、そうするとこの今、会長の力関係ということをお願いしたのは、校長、教員まで動かせる力があるのか、教育委員会まで動かす力があるのか、学校まで動かす力、どういうふうな子どもということに先ほどスキーを例にとっておっしゃいましたけれども、そのようなことの、まあ恐ろしいといえますか、希望と申しますか、そういったことをやるにはやっぱりそれなりの冠絶したものがなければいけないと思うのですが、そういったことをどのようにお考えですか。

関校長；微妙な事だと思います。シビアだと。例えば、この木島平小中学校で例えばビジネス、アート教育をやっているのですが、アート教育をうんと充実させたいよ。小学校には美術の先生がいないですね。ぜひ何とかしてほしいということがこの委員会で検討されて、地域にもなかなかそういう人がいない、そうすると教育委員会で何とかしましょうよという話になります。教育委員会はそういう助言をいただいたとすると、何とかそれを実現に向けて努力する、村費に付けるというふうになるかもしれませんね。そういうことはこういうシステムの中では可能だと思います。ただ、県は県で違うので、これは村の場合です。

湯本委員；もう一点、小中一貫校となりましたけどもどうして小学校の校長先生と中学校の校長先生がいらっしゃるんですか。

関校長；小中一貫には2つあります。併設型と分離型というのがあります。本村の場合は分離しているんですね。校舎もひとつではありません。教育理念がひとつなんです。これから説明しますが、教育方針もひとつです。だから離れていても1校としてつながっているものという、文科省の方には分離型の小中一貫ということで申請をしてあります。ですので「学園」と付けちゃうと困るんですね、逆に。一緒になっていると「学園」でもいいんですけど、どちらかというと。信濃町の信濃小中学校、あそこは学園でもいいんですね。一緒ですので、併設ですので。あれとは違う感じ。だから校長は2人いるんです。それも今、規約をつくっている最中なんですけど、1人にはしません。小学校は小学校、中学校は中学校で小中一貫という組織は変わりません。

小島会長；後半の話の中できっとそういう話題に直結する内容があるのだと想像しますが、どうでしょう他の方、もしいらっしゃれば、なければ後半の話を続けてお聞きして、関先生よろしいですか。それからまた、その後、Q&Aすることにしていただこうと思います。では関先生よろしくお願ひします。

この木島平型教育の特徴のこの学びの共同体、それと特徴②の保小連携教育、小中一貫教育の推進、コミュニティ・スクール、この今、3枚のスライドは地域の村民に向けてのスライドです。それを持ってきました。教育長が全地区を回ってこういうことで話し合った、その資料と同じです。

続いて、さっき小中一貫なのに校長さんが2人いるという話がありましたが、共有しているものがたくさんあります、教育理念と目標です、教育理念は、ふるさと木島平を心に刻む教育の実践、教育目標は、小学校が、心と体をひらいて学ぶ子ども、中学校は、心と体をひらいて学ぶ生徒にしてあります。これはあくまでも小中学校の目標です。小学校1年生から中学3年生まで一貫して育てるその目標がここにあります。子どもが心と体をひらいて学ぶ授業実践を小中一貫して行うことを通して実社会・実生活に生きる力を養うとともに、ここからです、将来にわたって学び続ける学び手を育成する、これが小中一貫教育の子どもを育てる目標です。ですのでここは小も中もありますが、一応、取り組み目標ということ。これを小学校中学校で共有しています。それでこれも共有しています、3視点です。1です、学校運営の基本を「学びの共同体を基礎に置く学校づくり」としていますよ、視点2は、共同的な学びでつなぐ一環教育によって、「自立した学び手」を育成しますよという、3つ目には、「発達段階に応じる指導と」「地域との連携」をキーワードに教育のシステムを構築していますよ、具体的には、見開きになっているお配りしましたパンフレットがあるのですが、それを見ていただくと良くわかります。そこに書いてあるものをここで説明しています。授業改善を行います、それは子どもと子ども、子どもと教師が互恵的、お互い認め合う関係をつなげ、つながり合う共同的な学びを実現していきます、そういう授業をしていきますよ、教師が一方的に授業をするのではないですよということです。教科指導、算数・数学、外国語活動・英語、体育、図画工作、美術で小中が校の先生たちがTTで指導しますよ、9年間の年間カリキュラムを作りたいという。3つ目は交流活動をやりますよ、小中の枠を超えた異年齢集団による交流活動を展開しますよ、ふれあい音楽会とか、合同集会等を繰り返しますよという。ふるさと学習を行いますよ、1年生から4年生までを一貫教育の中の前期としています、その中では飼育栽培活動を大事にしますよ、地域探訪活動を大事にしますよ。5年生、木島平のお米作りに携わりますよ。後期、中2・中3では村で農村文明塾という、そういう講座を立ち上げています、そことコラボして学びますよ、職場体験も充実させますよ。ふるさとに学ぶ学習をやりますよ、ここは場所が変わるとまた変わってくると思います。体験学習、5年生は八丈島の離島体験に23日に出発するんですが、3拍4日で行きますよ。4年生は統合した後に残った小学校を農村交流館として立ち上げましたので、そこを利用して通学合宿をしますよ。中学校1年生は、コミュニケーション合宿を行いますよ。2年生では西穂登山。3年生ではルクセンブルグとの交流に参加しますよ、こういう体験学習を小中一貫の中で大事にしていきますよというふうに。

見開きの物をご覧ください。これは今年作ったのですが、今、説明したことがここに書いてあります。その中には、視点1というところをご覧ください、一貫教育の3視点という、こういう立場で学校づくりをしますよということ、公共性、公平性、卓越性というふうに書いてありますが、そういうことです。視点2です、聴き合う関係を作っていきますよということ。視点3です、これはさっき、義務教育を前期・中期・後期で3つに分けてやっているということの説明になります。その右のほうに来るとそういうこと

をしながら自立した学び手に育てていきたいと思いますという、真中に水色で囲ったところがありますが、わからないと言う子どもを育てましょう。友の思いに心を寄せる子どもを育てましょうとか、ちがいを見極める子どもを育てましょう。という学校の先生たちのキーワードが入っています。

裏に行きまして、さっき一貫教育のシステムという話をしましたが、1年生から中3までそんな風に課程を作りました。先ほど算数・数学、英語・外国語でTTしますよなんてはなし、それは自然と一部教科担任制ということで5・6年生でもらっている実態です。その右にある、真中にある一貫教育の運営組織図というのがあります。これがさっきコミュニティにもありましたが、別に一貫教育の推進委員も立ち上げています、そこで作っているものです、先生たちが作っています。授業づくりチーム、交流チーム、環境づくりチームが今できています、その今年の1回目の資料が小中一貫教育日より、これを配ってもらってあります。こういうものを小中でやっております。ですので、言いたいことは小中一貫にしてもコミュニティにしても、私だけが先頭を切って走っているんじゃなくて、先生たちが実質部隊として中で取り組んでいる状況があります、そうでなければ26年度ではできません。さっきの音楽会なんかは交流チームの中から出てきたアイデアです。それから中学校の英語の先生が今年から6年生と入ってやっているんですが、これも授業づくりチームの先生たちが出したアイデアなんですね。だから先生たちが実質出来ることをアイデアを出し合ってきていただいているので、それを年間計画の中へ納めていくという、そんな状況です。

これからは、学校の様子をちょっと紹介します。これは4年1組の今年の国語の風景です。こういうふうにオープンになっています、廊下がなくなっています、これ担任です、市村昌平 君です、3年目です、国語の授業をしています。5年2組の算数です、ここ空いていますのでこっちの廊下から写真を撮っています。3年目の先生です、中澤かおりさんです。これは1年生です、校長室です、1年生の新生です。これはQ-UというものがあるのですがQ-U検査の結果です、昨年の6年生です、友達関係とか学級所属感がわかるものです、名前は入っていませんので1組と2組両方のデータです、これが高いんですね、本校の特徴として学年が上がれば上がるほど所属感が高くなっていく、その数字は先生達にとってはすごくいいデータです、先生方が一生懸命やっているのこういう数字が出てくるんだよという話をしています。ひとりひとりをケアしていく学級経営ができているなというふうに思っています、これはここにあるのですが、小中高交流学力向上事業、これ飯山市の教育委員会と飯山北高校が共同でやっているものです、飯山市、木島平村、野沢温泉村、栄村の6年生を対象にした算数・数学のつまづき調査なんですね、ここはアンケートですので意識です、学力の問題ではありませんデータです、それでおもしろいなと思うのをちょっとピックアップしてみました、6年生です、算数の問題を解くのは楽しい、全体で当てはまるのは20%、昨年の6年生が61%なんですね、少し当てはまるが34%ですね、これを2つ合わせるとすごい数字になるんですね。算数は将来役に立つか、59%、昨年の6年生が79%、少し当てはまるが21%で100%。算数の問題、問題を解くだけでなく理由や考え方も理解する、当てはまるが35%、53%、少し当てはまるが47%、2つで100%ですね。友達と話しながらいろんな解決の方法は自分のためになる56%、79%。算数の授業は楽しい66%。発言や質問をする32%。みんなで考える方がいい87%、こういう意識の違いが出てきています

こっちも面白いです、授業で分からないときどうしますかという問い、全体の中で自分で考えるは2

0%、友達に聞く47%、先生に聞く29%、そのまま4%。昨年の6年生は友達に聞くが87%なんです、さっき説明しましたが、授業改善の中で分からないことは友達に聞こうよ、というふうになってやっています、その成果が出ているかなというふうに数字で分かります。

もっと面白いのがあります、宿題が分からないときはどうしますかという問いです、友達に聞く全体が15%、家族に聞く57%、自分で考える19%、そのままという人が5%、先生はすくないですね5%。宿題が分からないとき、昨年の6年生が学校に来て友達に聞くというのが55%あるんですね、家族に聞くが32%、先生は少ないです。このデータがこっちにも入っていますので、建物のデータから2%は下がりますよね、そう考えると友達に聞く13%ということですよ、55%。私たちは学校では数字はもういいよといっているんですね、ただ、授業の中で分からないことをそのままにしない、皆で頭突き合わせて解決していこうよと、そういうスタンスの授業をしていますのでこんなふうになっています。これって先生方のエネルギーになります。この先生が座席は合いません、今、中野平中学校だってどこでもやっていますが、共同的な学びの典型的な授業をやっています。

これは昨年の6年生ですね、こんなふうにこれ算数なんですね、自分達で考えた方法で実験をしているんですね、みんな集まって。

これが2年生ですね、2年生の子どもたちが授業をしている様子です、友達と一緒にこれをやったりしています。

これは1年生ですね、これはペアになってやっています。

これは昨年の1年生です、今、2年生です。

これは1年生の子どもたちに読み聞かせ、地域の方が来てくれて読み聞かせをしています、こういうの結構どこでもやっていますね、オープンスペースなので、こっちのクラスとこっちのクラスが一緒になって聞いています、あっちの方でも地域の方が来てくれてこうやって説明してくれると食べ付きますよね、集中して聞いています。こんな感じです。

学校を開いてどんどんこう地域の人に来てもらう、そういうような姿勢で廊下もみなオープンにしております。

小学校の現状を説明しました。こういう子たちが中学校に上がってゆく、そうすると中学校がそれを受けて、どの子もダメージを受けないようにしていく、小学校でやっていることを中学校へ繋げていくということは、中一ギャップはありません、ですのでその子たちが、この昨年の6年生は、この学級はそのまま中学校へ上がりました。ただ、課題は学級経営がトラブルになって学級経営がうまくならないと、やっぱり学級を変えてよという声も出てくると思います。だからある程度5・6年生の先生方は学級経営をちゃんとやらないといけないという、そういう意識のもとに運営をしているところです。ここにはありませんが、保小連携もしていますので、保育園の子たちが小学校に来てやっている、ですのでこの子たちは、子どもたちは保育園の年長さんで何回も学校へ来て学校探検をしたり、1年生と、上の学年と一緒に体育学習をしたりしていました、だから保育園から小学校へ上がってくる段階の、ありましたよね、そういうダメージを受けてしまう、そういう子どもも今いません。保小連携、小中連携をするということは、子どもの情報をつなぐ、おうちの方の声をつないでいくということに、即有効だなというふうに思っています。

長くなりました、以上です。

●質疑応答（後半）

小島会長；ありがとうございました。さて、ちょうどいい時間繰りというか、予定通り進んでおります、あと10分、15分位、関先生への質問、意見を出していただければと思います。

小林委員；倭小学校PTAの代表で来ております小林です。お願いします。関先生のいらっしゃる木島平小学校の小中一貫校の状況を見て、とても素敵な環境かなと思いました、児童数も含めまして。私どもの小学校は全校児童数が現在52名、1年生から6年生まで、家庭数は41と、だいぶ小さい小規模校であります。それで1クラスは一番多いところで6年生の10名、あとは8名、7名というクラスで続いております。私が一番問題と思っているのは再来年27年度の入学する子どもが2名、しかも男の子1人、女の子1人の予定です。その中で合併をされた、過去に赴任されて感じられてきた今までの状況を踏まえて、私どもの学校、ちょっと数字だけ並べて申し訳ないですけども、この人数に対してどう思われるのか、ご意見等をいただければと思います。繰り返しですけども、算数の担任、英語の担任という割振りはとてもできないような学校、児童人数でございます。先ほど5年生はお米作り、私どもも小人数ではありますがやっております。ただ、その2名の子が上がってきた時に、とても2名で米作りというのは出来ない状況にあります。私はそこを非常に懸念しております、例えば学校で体育の授業をやるにしても男の子1人、女の子1人、どうしようもないような状況です。かといって他の学年とあわせても体力の違いがあったりして、非常に苦労していくのが目に見えているような状況です。よいアドバイス等、端的に今、数字だけ聞いていただいて、思われた感相なりをいただければと思います。お願いいたします。

関校長；木島平小学校、木島平村の場合は、合併は平成の大合併に端を発してどういう村を作っていくかという中で進んできている、その中で先ほども言いましたが、統合を一石としないで一石二鳥、三鳥、四鳥にして村づくりを推進している、その中の子どもづくりというところで、ですので、2校よりも1校という道を選んだんですね。たまたま人数が多かった、それでも78人位のたぶん学校だと思います。僕が着任した時にある保護者が、良かったね統合して、どうしてですかと聞いたら、子どもがたくさんいると競争力が出る、切磋琢磨していくというふうに言われたんですね。それもそうだなって思う反面、私は学校現場ですので、それもあるけど、片方では多様な子どもに学ぶっていう、そういう事が必要ですよ。いろんなバリエーションを持った、いろんな子ども達と、いろんな関わり合いを持てることが大事ですよ、だから統合してよかったですねという話は。だから食い違った意見もあって当然だし、自分の思いだけで通っていかない、ちっちゃな社会ですので、そういうことが絡み合って6年間で成長していくんですねーなんてはなし、そこを見ていってくださいよーってのはなしをしました。ただ、数の問題

という困ってしまうんですが、僕は、さっきも言いましたが、子どもと先生を含めた対人と、学習、活動の3つがあるとすれば、多い方がいいですね。例えば周りに人がたくさんいた方がいろんな多様性に触れることができる、何人からというのは私の口からはなかなか言えないと思うんですが、多様な意見の中で自分が成長していくというふうに考えると、多ければ多いほどいいと思う。ただ、それは教育行政で条件整備するところだと思うので。ただ、さっきも言いましたけど、複数学級の方が僕はいいなと思っています。それが複数という1学級ではない、2学級、3学級、4学級それ以上になったりする、そこも教育行政の範囲だと思うので、そういうことは現場の私たちがなかなか考えられないですね。ここの適正規模というふうに銘を打って審議会がされているので教育行政が未来の倭の子どもたち、中野の街をどうするかというそのビジョンの中でどういう適正にしていくかというのが自然と決められるかなと、私たちは現場ですので、そこで教育委員会の理念を具体化していく、推進していくという立場にいる。さっき、本村は学校現場の先生たちは加わらないという話をしましたよね。これちょっとオフレコになっちゃうんですが、先生と教育長がいうには、一緒になってこう新しい学校を作っていきたいんだと、ただ、先生方から納得しない、そうすると子どもになくなくなっちゃうけどどう？ってそんなこと問えないでしょ。こういう風に審議会に参加している議論の立場に立っている人たちにはアンケートを取ってもいいけど、何も知らない一般の方になかなか問えないです。と言われました。それはちゃんと収集が付きませんよ。っていう風に言われました。そういうことがとかく学校現場から出ているんですよ、保護者から出てくるとか、先生方から出てくるんですよ。というふうに言われて、だからシビアな行政の立場で統合する、そういうところには学校の先生たちはアドバイザーではいいけど、実際には関わらない方がいいという、そういう判断だったのです。なので、今言われた、どの位の規模がいいというところは私たちは、なかなか答えられないですね。よろしいでしょうか。

小林委員；ありがとうございます。一言だけ、合併前後と比較した場合、天秤にかけた時、どちらが良かったという判断は付きますでしょうか。

関校長；21世紀に向けての子どもをつくるという壮大なメリットで進んでいる私たち、という風に理解していただいて、僕は今のままでいいな、良かったなと思います。そうでなかったら小中一貫、保小連携は大変なんですね、忙しいですね、そういうことを職員が率先してやってくれませんか。子どもを育てているというそういう実感があるから、ある程度先生たちも頑張れるのかなという、これが、ゆくゆくはあちこちの市町村でも起こってくることでよね、そういうところにまた何年後には先生たちは赴任するんですよ、そこでの経験に生かされればいいかなってそういう話を私いたします。

清水副会長；今、倭小の会長さんの小林さんに繋げてですが、今、先生のお話をお聞きすると、子どもたちが多様な考え、多様な経験で子どもたち同士が関わって学びを展開していくそんなお話があっ

た訳ですが、ところがその前は3校で、北部、中部、何部、そのところで7人、6人というような20人を割る学級だったですよ、それで倭小では今、危機感を感じて、一年生は2名、現在6人、7人その世界ですよ、そういう中での話を聞いていた中でまた、ひとつな思いを持たれたと思うのです。その前の時に、北部、中部、南部に別れている時に子どもが減っていくそのことに対する危機感とか、学ぶことに関して一般的ではなくて、学ぶ中でそういう危機感みたいなものは話に出ていなかったかな、お話聞かなかったですか。

関校長；10年後を考えた時には、数字では当然減っていく、おぎゃあと生まれた子供達の統計を取っていて、当然減っていく中でこの事業がやられたことは聞きました。

清水副会長；未来どうなるはいいんですけど、今、やっていて子どもが減ってきている、このとこで今までこういう授業でいたけども、このとこにきてどうもそこのところが活気がでねやなとか、そういうような問題、先生達とかPTAの中で話を聞いていませんか。

関校長；特に聞いていないですね。ただ、こういうことは言われていましたね。木島平村は3村が合併してできたんですね、その時に3小学校があった、それで役場の関係も全ての役職は持ち回りだと、だからPTAの会長さんも持ち回り、慣例があったようです。3村が一緒になって木島平村ができたんだけど半世紀かかってもなかなか一緒ということは言いにくかった、ただ、統合して1校になったことを契機に昨年のPTA会長は、もうやめようと、持ち回り制はやめようという、今は準番制とか一切ないんですね。これって、本当の意味での半世紀かかってできなかった3村の統合だよ、ていうようなことの話はされてきました。そのぐらい意識が変わるといことを話されていましたが、答えになりませんね、すみません。

清水副会長；関先生が高校生の頃、今から30年前、私が木島平中学におったんですね、30年前の時に今この問題が起こったんですね。北部、中部、南部この3つの学校が1つで行くか1つにするか、3つでいくかということ、私は木島平中学におったんですけど、中学も呼び出されちゃあ、夜、会合に行きました。村民がそこのところで1つがいいんじゃないか、あるいは別々の小さい学校でいいんじゃないかってことを非常にそのところで考えて結論としては、小さい学校でいいんじゃないかと、北部、南部、中部、政治的なそういうものは一切なく、子どもの学びの世界から考えていって、それでいいんじゃないかという結論に達して、学校を建てたりして3校でたんですよ、以来30年過ぎた、そうすると全く反対になってきた、この反対になった理由は何かという、政治的なものは別にして、教育のあるいは学校の学習の中身に関わって、やっていく中で何かその中で問題が出てきたんじゃないか、そこが知りたいんですよ。小さい大きい問題ではなくて、こう人数がどんどん減少していく中で、その当時とここでは変わっていくものがそこにあっただけじゃないか、それを聞きたいんですが、どこかでお聞きしていれば話してもらえればと思ったのです。

関校長；南部小学校が一番最初にできて、北部小学校ができて、中部小学校が一番最後にできたんですね、それで、段々段々人数が、800人はいません、150、160人ですかね中学校は、僕、中学は4組だったのですが、今は2クラスで20人規模、40人位ですね、その頃からもう先々、少人数になってしまうということはあったわけですね、南部小学校もオープンスペースでしたね、北部小学校もオープンスペース、一番最後にできた中部小学校もオープンスペースです。昔作った学校、40年前に作った学校でオープンスペースで作っているなんてのは画期的なことだと思っています。当時はそれだけ各地区の小学校の力が入っていたんだなあっていうふうに、すごく画期的な校舎、お金をかけて、ただ、本村は農業の村ですね、農業を選択した村なんですね、観光といってもスキー産業は下降、大きな企業を誘致してなんていうことは絶対にない、中野氏とは違いますね、そういう中で少子高齢化はどんどんどんどん進んでいく、いろんな要素がかみ合って1村2校にするか1校にするかというふうになってきた、察するにその位だと思います。

北原委員；北原と申します。まとめて2つほど質問をしたい、今回の一貫校の目的の中には一切触れておられないですが、教育予算の削減というのが入っていないのですが、その目標値か何かがあったのか、あるいはそういったことが考えられていたのか、当然、年間数千万のメリットは出るだろうと思いますが、そのへんがどうなのか、もう一点はですね、今回フレームワークとしては立派なあれですけども、やはりあの先生方の立場が、かなり小中学校での壁があるんじゃないか、私は小学校の先生、私は中学校の先生、確かにこのプログラムを見ましても、異年齢での交流を盛んにするという事プログラムはいいんですけど、生徒の側に立ってそうあるべきだみたいなフレームワークは立派なんですけど、先生方が本当にそういう意識改革ができるのか、しかも転勤がしょっちゅうございますので、全然今まで中学校にしかいなかった、というぐらいに転勤されてですね、本当にそういう意識改革ができるのか、確かに合同職員会なるものがありますけど合同職員会ぐらいで意識改革ができるとは思いませんけれどもですね、そのへんはいかなものかなということが質問でありまして、もう一点ですけども、一貫校の場合は木島平村は不登校児童が、小学校は中野と一緒に非常に少ないんですが、中学校の不登校児童というのは非常に多いような数字があるんですが、今回の統合化というのはその辺の目標、もうちょっと中学校の不登校児を減らそうかというような話が目標にあったのかどうか、あるいはそういうことが可能性が十分見られるのか、その辺をお伺いしたいです。

小島会長；今、3点、統合に伴う教育予算の目標値があったかどうかということ、それから小中の先生方の意識のお話、3つ目ということで時間があればお願いしたいのですが、中学校の不登校対策、対応、これのからみはどうかというお話し。

関校長；小さな村ですので当然、教育予算の関係は切っても切れないと思います。本村の場合なんかは

過疎債を使ったりしてますね、だからもう、やる事業については責任を持ってやらないと本当に具合悪くなってしまふ、そういう中で2校、1校、その辺の計算はされたんじゃないかなという、推測ですが。先生方ですが木島平村の高校も抱えていて、農林高校、小中高校で村の職員会をしているんですね、結構交流しているんですね。今日、話の出ました小中一貫の推進委員会は月1回、コミュニティのほうも月1回、重ねてやっています、出来ないところは各部会でやったりしていて、結局さっき、先生方のなかなか交流、意識も共通にならないんじゃないかという、だから、具体的にはですね、1年生の先生たちが中3の先生達と意識を合わせるということは難しいですね。小学校1年生・2年生の先生たちが、中3まで見通して子育てをしてくるよという、教育しているよという、そこへ持っていくのが難しいですね、それもあります、そこをなんとか埋めていかなくちやいけないなって思います、最後の不登校ですが、去年は2名でした、中学校、今年1名、まあ、不登校は数字に出ない家庭的な問題とかたくさんあるので、一概に0がいいかとは言えないんですが、小学校は0です。ひとつは不登校対策ではないですね。ひとりひとりを大事にするなかで結果として安心して安全で居心地がいい学級になったり友達関係を見つければ自然と不登校の足が向かない子どもたちも減っていくのではないかなというふうに考えています。学習も同じような考えです。わからないことを同じように皆でこう頭を突き合わせてやっていけば、点数が独り歩きするんじゃなくて結果的に点数が残っていくんじゃないかなという立場でやっている、不登校の状況はそんな感じです。

市川(大)委員；科野小学校の代表できています市川ですよろしくお願ひします。関先生とは何度かお行き会ひしたことがあるかと思ひます。せつかくですので質問させていただきます。科野小学校も今、九十数名いますけども、あと4年後ぐらいには、倭小学校と同規模になる予定です。したがって合併のことも話して話題に上ったりするわけですけども、今、新しくなつた木島平小学校の規模をみると、恐らく平岡小学校、長丘小学校、倭小学校、科野小学校の4校を仮に合併したとすると同じぐらいの規模になるのかなという人数かと思われるんです、だいたい260名位でいくとだいたいその辺になるかなと、地域の距離とかそういうものもあるかと思ひますけども、今の木島平の合併した学校と、私どもの4小学校の仮に合併したとしたらイメージ的にどんな風に思われるかというようなことをお聞きしたいのですが。

関校長；イメージできません。できませんというのは、うちの本村は1村なんです、中学校が1校じゃないですか、そこへ向けての条件整備なので、中野市はそういうわけにはいきません。ですので皆さんこうやって集まっていらっしゃるのかなあって思ひて、7回も審議会を重ねて検討されている。だから、僕も木島平で初めて統合したところに行つたので、今の現状しか分かりません。結局あと十年後、これでまたどんどん減っていくわけですよ、どうするかという、また同じように検討をまたしていかななくてはいけない場面が来るかもしれません。これでいいというのは、なかなか歯止めが利かない状況というのはありますが、これはというのはなかなか私からは言いにくいです。

柴垣委員；今の市川さんの質問と関連するんですけども、関さんの話を聞いてて思ったのは、特に印象的だったのは、小学校の統合をきっかけに旧3村の持ち回り制も変わろうとしているというのがとても印象的でした。やはり小学校の統合というのは地域の統合と歩調を合わせながら進むと自然的になるんだと思うので、先ほど市川さんが言ったような4校統合の時に仮になったとした場合は、4校の地域のいろんな地元意識とか未来意識とか、共同体意識なんかもどういふふうに、それに合わせて育てていくか、変えていくかも一緒に進めなければならないかなんてふうに関さんの話を聞いて思いました。あと、関さんの話で面白かったのは、どうしても地域の人は大人数の小学校がいいということをよくいってですね、競争があつていい。それに対して関さんが否定してくれたのがとても共感をしました。関さんは大人数の長所はむしろ多様性が確保されることだとおっしゃいましたけども、競争というのはむしろ多様性の否定になるんですね、価値が一元化しないと競争できないわけで、同じ大人数がいいという部分も関さんのような見方があるというのが共感し嬉しく思いました。

関校長；いろんな形があるのではないかなと、実際2年間かけていろんなところを見に行きました。三鷹に行ったり、富山へ行ったり、大阪へ行ったり新潟へ行ったり、皆それぞれの形があつて、これっていうものがなかなかないんですね。都会ではコミュニティでなかったらもう、学校は成り立つかないです。学校ができた時には周りがベッドタウンで子どもがたくさんいたんですね、ところが何十年たったら周りに子どもたちが誰もいない、遠くから40分かけて通ってくる子どもたち、だから地域がないんですね。その中で学校は荒れちゃう、迷惑をかけるから、周りから何か言われる、その度に地域から応援して欲しい、けどなかなかシステムができない、コミュニティなんですね。グラウンドに風が吹いてピューと砂が飛んでいくともう苦情が来る。野球部の練習でボールが飛んでいくと苦情が来る。だから街中の中学校なんかはすごい高いバックネットが張られていますね、どの学校へ行っても水まきのホースがグラウンドに何箇所もあつて、いつも水をまいています。そういう状況の中で学校を運営しなければいけないところのコミュニティと、今、言われたように、もう本当にそういう人がたくさんいるよというコミュニティと違う。一番どういう形がいいのかなということを探りながら学校ができていくのかなと、だから校長も地域の方も皆で話し合ったり、視察することは大事かなというふうに思っています。

小島会長；ありがとうございました、そろそろ予定の時間まで10分になりましたので、どうしても発言したい、これだけは聞いておきたいという他の委員の方、いらっしゃいましたら是非。
関委員、いかがですか、今日初めて参加していただいて。

関委員；私、今日初めてコミュニティ・スクールを聞かせていただいて、これから少子化に対する適正規模を考えるうえで考える選択肢が広がったということを只今実感いたしまして、勉強にな

りましたありがとうございました。

湯本委員；先生にお聞きしたなかで愕然として今いるんですが、お話の中で単級だと教師が児童を私物化してしまうということを先生おっしゃったんですが、このことについてどういう考えのもとにこのことをおっしゃったのか、ちょっとそれが気になりました。

関校長；3つに折ったパンフレットがありますよね、それを見ていただくと分かるんですが、授業を変えようということをしています。新しい時代に生きていく子どもたちにどういう力を付けさせるかなという、その時に先生達も一生懸命、専門性を気付かなくちゃ、見つけなくちゃいけない。ただ、私たちはどうしても染みついているものがあるんですね、例えば僕が中学校の時には先生たちは黒板の前で竹刀を持っていました。バチバチやりながら、そういう授業でしたね、緊張していました。チョークが飛んできたり。でもそういうふうにして知識を詰め込まれてきたんですね、それって経済がうなぎ登りとか右肩上がりの時にはそれでも就職口がありましたよね。僕、教員になってますけど、みんな。でもこれからの社会ってそれでいいの？って、この疑問を投げかけながら自分達は授業改革をしています、これは子どもたちの人権を尊重しようってことに始まります、尊重しよう、だから一方的に子どもたちに教え詰め込むのではなくて、子どもたちに考えてもらいながら授業を進めていこう、そういうスタイルです、だから先生たちはすごく研修をしなくてはいけない、だけど染みついたものもたくさんあります。黒板を背にして一生懸命と書いている、それを見る子どもたちは特に中学校になると寝てますよね、書き写すのが勉強になってますよね、そういうことから脱却しようという、そういうスタンスですね。それで私物化ということですね、いいように自分のペースに持ってきちゃう、前の学校でこういう教材でこういう授業をした、受けが良かった、それを同じように持って来て授業をする、子どもが違うのに、そういうことをよくやりますよね、たしかに。そうじゃなくて、もっともっと子どもたちに課題を委ねて課題解決学習を子どもたちに遊ばせようと、そのための準備をしっかりやりましょうというスタンスに変えている。だから小学校の先生たちは学級ごとになりがちですよね、廊下の窓は絶対に開けません。入っていく時必ずドアを開けて入っていく、やったことは窓を開いて、いつでも見れる、子どもたちも隣のクラスの授業を見ています、隣の先生も見えていますね、そんな開かれた中で授業をしていく、心と体をひらいて学ぶというのは子どもたちの教育目標ではないんですね、先生方の。そういう意味になっています。私物化というのはそういうことです。私物化しては子どもは育ちません、先生を超える子どもたちを育てることが私たちの使命だと思っているのでそういう話は皆にしています。

小嶋会長；ありがとうございました。もっともっと話をお聞きして、いろいろかなりいい議論ができたかなと思うんですけど、残念ながら今日はもう時間がありません、関先生、たくさん話題を提供していただいて我々の審議会にとって今後、かなり踏み込んだ議論をここでやっていく為の、

非常に重要な視点や情報をいただきました。お礼を申し上げたいと思います。1時間以上時間をいただきまして、とっても良かったと思います。どうもありがとうございました。

関先生、もうちょっとしばらくそこで居ていただいてあと5分ほどで次回の日程とそれから内容について簡単に事務局の方で図っていただいて、今日をお開きにしたいと思いますが。

まず、日程を先に諮りたいと思いますが、次回は8月末のどこか、平日のこの時間ということを開きたいと思いますが事務局の案は28日の水曜日の3時ということですがいかがでしょうか。委員の方のご都合を全部満たすことにはならないかもしれませんが、それでよろしいですかね。どうしてもその日はダメという方はちょっと手を挙げていただいて。下川先生。

下川委員；学校は水曜日は職員会議を入れる日なので、水曜日という曜日は大変厳しいです。

小嶋会長；今日は木曜日ですね。木曜日だったら大丈夫ですか。29日だったらいかがでしょう。

下川委員；校長は申し訳ないですが、中高等学校保健会の総会がもう当初から予定されておりまして、恐らくそちらもとても大事な会ですので。

小嶋会長；そうすると28日も29日も校長先生方はきびしいということですね。では調整させていただいて、通知を差し上げます。ひょっとしたら水曜日になるかもしれませんが、なるべく木曜日、でも校長先生方は残念ということですね。事務局にお任せしますがよろしいですか。

柴垣委員；こうやってその都度決めていくと、この問題がずっと付いてまわりますよね、出られない人が分かっているながらその日に設定せざるを得ないこと、一番当初に議論になったように、だいたいこの曜日と決めておいていただけると予定を入れる時にその頃はぶつかるかもしれないから避けておくとか、そういうふうな配慮ができる。

小嶋会長；そうすると今のご意見だと、木曜日がいいということなんですが、29日の木曜日は校長先生の予定が変更できないでしょうから、一周まえの木曜日だと22日、私がちょっと公務で出れないので清水副会長に代理でやっていただければ。9月5日木曜日は難しい。では22日は私、調整がつくかもしれませんが、万が一ダメな時には副会長の清水先生に開催していただきます。第一候補は22日、そしてどうしてもという時には翌週の29日、いずれも木曜日です。29日は残念、校長職の委員の方たちはお休みになりますが、どちらかでということで通知を差し上げますのでよろしく願います。それからもう一点は次回の内容なんですけど、私、会長としてはこれまでのこの審議会の審議の内容をですね、文書の形のあるものにまとめておきたいと、大相撲もそろそろ中日ですよ、我々も千秋楽まで、つまり15回ぐらいはきつと必要だろうと皮算用をしているんですが、次回が8回目になりますので、そのところで中間報告、これまでこの様に審議してきたんだということを毎回毎回の会議録がホームページに

アップしたり資料をお送りさせていただいていますが、それを基に事務局の方でまとめていただいて、我々の方で間違いがないかどうかということを見て検討して中間報告の案を提示させていただこうと思いますので、それを踏まえた会議にしたいと思います。それが次回です。もう一点、じゃあその次どうするんだと、折り返しではないですけども、もう後半に入りますので実質的な議論をここで進めたいと思います、ただ私とっても慎重な性格で申し訳ないですが、その議論に入る前に是非、教育の現場、学校を我々委員が見せていただく、学校だけではなくて地域を見、学校も見ということをやっておかないと、私、よそ者なので、中野のどこにどんな学校があるかってのを車で走っただけで申し訳ない気がしてますのでぜひ一緒に地域へ出かけて行く時間と機会を9月に取ったらどうかということ事務局の方へ提案させていただきました。そうしたところ、9月はいろいろ学校は行事が目白押しというかあるだろうと思います、そこをある程度利用させていただいて、出かけていくスケジュールを組みたいと思います。これは定例の審議会の合間ということですので第9回、8月の末の8回の次を10月に開催することにして、9月の間に時間をできるだけ皆さん取っていただいて、学校や地域に出かけるということですので平日の昼間になるかと思いますが、スケジュールを組みたいと思います。その辺の調整は事務局にお願いして、そのスケジュールについても次回、内容と日程について提案させていただいて、検討をお願いしたいと思います、よろしいでしょうか。では、次回はそういうことでお願いしたいと思います。改めて今日は関先生ありがとうございました。最後までお付き合いいただきありがとうございました。

清水副会長；関先生、本当にありがとうございました。資料を作っていただき、重ねてお礼申し上げます。おかげさまで私どもこれから進めていくことに関わっても大きなヒント、示唆を与えていただいたように思います、ありがとうございました。皆さん、ご熱心に聞いていただき議論していただきありがとうございました。以上をもちまして本日の審議会を閉じさせていただきます。ご苦勞様でございました。

4 閉 会 (17:07)